

# 6 年 生 部 会

## 1 子どもの姿の捉え

小さいころから自分たちの考えを主張しあい、話し合うことが好きな子どもたちである。発表型・提案型の学習を多く経験し、考えを表現しながら成長してきた。また「協働して学びを生み出す子どもを育てる」という研究を通して、時にはグループで時には全体の場で、友だちと考えをぶつけ合いながら、取り入れながら生活してきた。最高学年となった子どもたちは、下級生を前にしっかりと自分であろうとしていた。同時に、ありがたい自分とそうでない自分の間で迷う姿もあった。

子どもたちの生活から見てきた課題は、大きく二つに整理できる。

**自分自身に関わること** ○自己評価が下がり自分に自信がもてなくなる。

○自分自身の判断を求められる場面が増える。

**他者に関わること** ○判断場面では、集団内の価値観が優先される

○同調を求め、関係が固定化する この中で、我々が「公共性」に関わる課題として捉えたのは関係の固定化である。

子どもたちは個々の知識や考え方を共有し、高め合うことができる。しかし6年になって聞かれたのは「みんなの前では本当のことが言えない」という言葉である。人と違うことを言ったり違う行動をとったりすると排除されると考え、周りに合わせるのだという。だから集団の価値観が子どもたちの判断基準として優先されてしまう。これは規範意識の薄さや自信のなさにも通じるところがある。

## 2 教師のねがいと手立て

課題として挙げた子どもの姿は、協調するというより「同調を求める」という言葉が当てはまる。自信をもって一人になれずに近い存在を欲しているからこそ、違いを許せない、違いを誇張する姿として表れるのではないか。そこでもう一度「違いを発見する」ことを重視し、他者との関係の中で自分の存在価値を感じさせること考えた。その際、他者への意識、自分への意識をこのように整理した。

**自分を意識する** ○自分と向き合う …自分と対話する、自分なりの課題意識をもつ

○自分に自信をもつ …自分を生かした参加の仕方、認められる経験

**他者を意識する** ○互いの立場に立てる …多様な判断を知り、他者の思いに目を向ける

○感じ方の違いを生かす …それぞれの立場や根拠を明確にし、折り合いをつける

○補い合って成功を感じる…個々の役割や目標をもちながら、同じ活動に取り組む

以下、教師の意識が実際の学習場面ではどのように表れたのか、また、子どもたちにどのような変容があったのかを、授業実践を踏まえて考えていく。

## 3 実践からみた子どもたちの姿

### (1) 算数「問題の考え方」

「公共性」という観点から問題解決の場面を考察すると、まず自他を含めた「多様な考え」の享受、理解、承認が必要になる。そして、その多様な考えの中からどの考えがどのような意味で算数的に価値があるのかが次の課題になる。一方、問題解決をいろいろな角度から考えることは、個人の問題解決能力を高めるとともに、問題を発展的に考える契機にもなる。一つの事象を「多様に考えること」や「多

様な価値にふれること」は、自他を柔軟な姿勢で受け入れ「公共性」を育てる素地となる。

### ① 指導事例

(問題) 130を2, 4, 6, 8, 10のように、連続した5つの偶数の和で表すとき、真ん中の数はいくつになりますか。

(N児) 仮に、2, 4, 6, 8, 10で30を6と求める場合、2, 4, 6, 8, 10の平均を考えてみる。 $30 \div 5 = 6$  (真ん中の数) 真ん中の数は全ての数の平均と考えられる。

別の数でやってみると、 $1 + 2 + 3 + 4 + 5 = 15$ ,  $15 \div 5 = 3$  (真ん中の数) なので、130を5で割ると26, これが真ん中のはず。

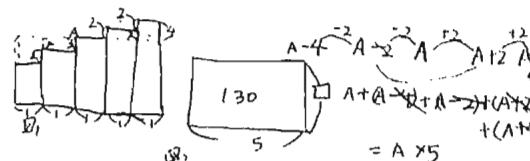
(K児) 例では「2, 4, 6, 8, 10」だが、数が変わっても「偶数」であることには変わりはない。(中略) 「2」を①だとすると「①, ①+2, ①+4, ①+6, ①+8」であるとわかり、これの合計が「130」だとわかる。

(中略)

$① + ① + 2 + ① + 4 + ① + 6 + ① + 8 = 130$ ,  $① = 22$ 。(中略) 真ん中の数は26。

(Y児) 連続した5つの数の真ん中をAとすると、小さい順にA-4, A-2, A, A+2, A+4となる。これを面積図に表す。(中略)

このことから必ず真ん中の数は5つの数の平均となることがわかる。だから、130を5で割って26。



### ② 指導を振り返って

確かな学習経験を積み重ねる意味で、個々あるいは全体で「学習の振り返り」をする。自他の考えを摺り合わせ、相互補完的な学習、すなわち互恵的な学習を展開することが大切になる。多様な価値にふれ比較検討する意味で「どのような学びができたのか」という観点から、再度自分の考えや価値について自問する時間が大切である。

### (2) 自然「動物に食べられる植物～分解者の存在～」

食物連鎖と生態系のバランスの大切さを理解し、自然界における人間の「公共性」を少しでも意識できればと願い、この単元を設定した。方法としての「公共性」では、実験の材料も方法も班ごとに自分たちで決め、全体に発表する段階でお互いの違いに気づき、触発し、高め合えるように試みた。

グループ①の話し合い：クラスのリーダー的な存在で知識も豊富で実行力もあるA男、ひらめきがいいがややふざけてしまうB男、学習態度が真面目で発想力も豊かなC子、学習意欲が低く発言もほとんどないD子。

A男：「この方法でやればうまくいくから」皆に指示を出す。

B男：勝手に図鑑を見て実験方法を知ろうとする。

C子：「ダメだよ。自分たちで考えてやらなくちゃ。早く本をしまってお。」

B男：「はいはいわかりました。」といいながら、自分で考えた実験に勝手に取りかかろうとする。

A男：「おい、ちゃんとやれよ。」とB男を注意する。

D子：「B男は、こんな風にやりたかったんだよね。」とさりげなく、かばってやる。

C子：「B男の方法もおもしろそうだよ。」とA男の方法ではなく、B男の方法を褒める。

A男：「そうか。じゃ、その方法に変えるか。」とやや淋しげにつぶやく。

D子：「でも、最初のA男のもよかったよ。さすがだよ。」とA男の気持ちをくみ取り、優しい言葉掛けをする。

C子：「じゃあさあ、両方の方法でやってみようよ。」

A男は全体授業では圧倒的に目立つ存在でクラスを引っ張っているが、やや気弱な面ももっていて自分の考えが上手く生かされないと不安になる。A男は自分と向き合い自分に自信をもつことができている。

て、多様な考えがあることや他者との違いは意識できるが、折り合いをつけ生かすところまでは至っていないようである。D子は全体の前では発言をしないが、少人数のグループでは雰囲気や和むように相手を思いやった言葉かけができる。自分を意識することは不十分で自分では実験方法を考え出す事はできないが、他者を意識することはできていて、互いの立場に立ち、相手を理解し認めることができている。これも同じ目標に向かって自分の役割を果たす姿である。B男は自分を意識することは概ねできているが、自分を表現するに留まり、相手の意見を聴くところまではできず、他者を意識するまでに至っていない。C子はB男の良くない点は注意しつつも全部を否定せず、B男の発想の良さを生かそうとしている。A男の意見とB男の意見の両方の違いを認識した上で、両者を生かすように折り合いをつけようと試みているところからも他者を意識することができていると思える。

4人は仲良しグループではなく、普段は別々に活動し個性も能力も違う異質な集団であるからこそ違う良さを出し合えたのではないだろうか。自然という事物現象を前にして、少人数の異質な個性の集団で、共通の課題に取り組んだ点に、他者に目を向ける関係が生まれてきたのではないかと考える。

### (3) からだ「バスケットボール」

#### ① 題材について

今回は「補い合って成功を感じる」という部分に焦点を当てた。バスケットボールではシュートを決めた人がもてはやされる傾向が強い。しかし「それぞれの役割や目標をもちながら同じ活動に取り組む」ことを目指すには、シュートの得意な人はどんどんシュートをし、あまり得意でない人は得意な人にボールを渡していくという考え方もある。そこで、バスケットボールにもサッカーのように「アシスト」の考え方を導入し、シュートに直接結びつくパスをした子に注目させた。

#### ② 指導の実際

チームは、最初は同じくらいの力になるよう男女混合の6チーム編成とした。リーグ戦は毎時間2試合ずつ行い、試合終了後はチーム記録表に記入させて試合を振り返らせた。その際、勝敗にかかわらず、その日の各チームのMVPを決めさせた。その後は、試合の反省を生かすようチームごとの練習時間をとった。そして、授業の終わりには全員が円形に集まってお互いの顔が見えるようにし、試合結果や良かったことなどを発表し合うようにさせた。

#### ③ 実践を振り返って

バスケットボールの授業は昨年に続いて2回目になるため、練習方法、ゲームのやり方などは、子どもたちがある程度理解していた。そのためすぐに試合を始めたが、得意な子がボールを持ったら一人でゴール付近までドリブルで進み、そのままシュートするというプレーが多く見られた。そこで、1時間目の振り返りで、チームプレーを強調すると同時にサッカーのアシストの考え方をバスケットボールにも導入したらどうかと提案した。すると、2時間目の試合から、チーム記録表のめあて・作戦の欄に「もっとアシストを増やそう」と記入するチームや、反省の欄に「もっとアシストをしよう」と記入するチームが出てきた。そして、アシストした子がMVPに選ばれることも多くなってきた。

この時点では、子どもたちの間に「他者の動きを意識する」や「補い合って成功を感じる」という雰囲気や芽生え、それぞれの役割や目標をもちながら同じ活動に取り組んでいたと思われる。これは自分への意識が高まったことの表れであろう。アシストを決めた子と抱き合って喜ぶ姿も見られた。

試合数が増えてくると、「アシスト」は作戦タイムの会話には出てくるものの、チーム記録表には記入されなくなってきた。やはり、子どもたちの興味は次第に勝敗に移っていったのである。

この実践を振り返って反省したことは、まず、「アシスト」という言葉の意味を子どもたち全員が理解していたかどうかである。「シュートに直接結びつくパス」と言葉で説明しながら、一部の子どもたちにプレーさせてみたが、サッカーに詳しくない子たちにどれだけ理解されていたか疑問が残る。次に、

もっとアシストを強調するようにルールの改正をした方がよかったのかもしれない。例えば、アシストには1点とし、アシストをしてシュートが決まれば合わせて3点となれば、アシストしようとする子も増え、最後まで他者を意識しながらプレーできた可能性が高かったと思われる。

#### 4 公開研究会での授業提案や協議会討議を経て

##### (1) 部会として授業改善のために目指したことや、そのための手立て

○グループを中心に「個々の違い」、「他者との違い」に目を向け、自分の有りようを意識化する

**自分への意識**

- ・ペースを合わせて活動するだけでなく、自分と向き合う時間をもつ
- ・グループの中で自分なりの関わり方を意識し、自己有用感をもたせる

**他者への意識**

- ・同じ問題についての考え方の違いを意識させる
- ・違った立場、視点から見たらどう感じるかを想像させる
- ・同じ目的に向かって互いのよさを生かし合う場を設定する

##### (2) 具体的な成果や問題点

①小さな集団では感じ、考えたことを素直に表現し合い、自立した個となっている。他者の意見を受けとめ、共感的にも批判的にも伝え合うが、全否定はせずに、互いを生かし合ったり折り合いをつけたりしながら学び合う関係が見られる。

②他者への憧れをもちながら、互いの得意なことを生かし合って活動しようとする。

③自分とは異なる意見の根拠や考え方の違いに興味を示し、納得がいくまで話し合おうとする。

小さな集団では実現しつつあることも、学級、学年全体など大きな集団では次のような課題がある。

①安易に他者に同調したり、多勢に流されたりして、自分自身の立場に向き合おうとしない。

②全体で話題にしていることを自分に引き寄せて捉えようとする。

③関係性の固定化から全体での話し合い活動において、積極的に参加しようとする意識が弱い。

##### (3) 協議会での話題・意見・質問など

・友だちに批判的な子どもの姿から、「聴く」ことについてどのように考え、指導しているか。発達段階として意識していることなのか。

・スキルとリテラシーの違いをどのようにとらえているか、6年生としてのリテラシーとは具体的にどのように考えているか。また、子どもたちの発達を縦軸に、各学習分野を横軸と仮定し、その段階で子どもたちが身につけるべきリテラシーを構造化して欲しいとの意見。

・それぞれの学習分野の切り口から子どもに向かっていることに共感できる。

##### (4) 協議会を経て、今後の課題であると認識したこと

耳慣れた言葉となってきた「聴く」ことについて、教師も子どもも、一人ひとりを受け止めようとする意識を日常の中でもっと大切にしなければならない。指導の先生からのご指摘があった。友だちがもっていることば、知識を自分のものとして取り入れようとしているか。批判もその一つの方法であるが、リテラシーを支える感情の部分にスポット当てる必要がある。

時間の関係で話題の中心に出来なかったが、多様な考え方それぞれを意味づけることができることが6年生としての「違い」の見方である。意味づける行為が次にどのように波及していくのかを子どもの姿で明らかにしていく必要がある。

また、学習中の子どもの姿を話題とすると受験期のことへと話題が転換する。教室の中の大きな問題であるが、6年の特殊性を部会として取り上げるのかは部会の内容を左右する大きな問題である。